

## マックス・シェーラーの現象学における感情の共同志向性について

横山陸(一橋大学)

本発表の目的は、マックス・シェーラーの共感概念を共同志向性(collective intentionality)として再評価することである。『共感の本質と諸形式』(1913/23年)において展開されたシェーラーの感情の間主観性理論は、ゴルディによって現代の英米圏哲学で紹介されて以来(Goldie: 2000)、近年盛んに取り上げられている。シェーラーの他者知覚・感情移入の議論が、心の哲学の文脈においてギャラガーやザハヴィによって再評価されているのに対して(Gellagher: 2008; Zahavi: 2009)、彼の共感論における「相互感情(Miteinanderfühlen)」は共同志向性の議論のなかで注目されている。共同志向性の議論は、もともと心の哲学の文脈においてトゥオメラとミラーによって開始され(Tuomela&Miller: 1988)、ギルバートやサルによってさらに展開された(Gilbert: 1989; Searle: 1990)。こうした共同志向性の議論を、シュミットは現象学の伝統と結びつけて、フッサールやハイデガーの現象学の再解釈を試み(Schmid: 2000; 2005)、さらに共同行為論としての「信念の共同志向性」から、「感情の共同志向性」へと議論を拡張するなかで、シェーラーにおける「相互感情(Miteinanderfühlen)」に注目する(Schmid: 2009)。

シェーラーによれば、狭義の共感には「共感情(Mitfühlen)」と「相互感情」の二種類があり、前者が「Aに対してBが共感する」という私たちに馴染み深い形式であるのに対して、後者は「AとBがCに対して同じ感情を共有する」という形を意味する。シェーラーが挙げる具体例は、亡くなった我が子の前に立つ両親の感情である。ここで父親と母親は亡くなった我が子に対して同じ悲しみを共有しているのであって、父親の悲しみにに対して母親が共感(同情)しているのでも、その逆でもない。すなわち、父親と母親は我が子に対する同じ志向性を共有している。ここに存在するのは存在論的には父親と母親という互いに独立した二つの主体であるが、現象学的には共同志向性の「主語」としての「我々」という唯一の主体である。こうした「共同志向性」としてのシェーラーの「相互感情」の特徴は、共同性においても個々人の個別性が失われない点にある。父親と母親は「彼」自身、「彼女」自身であり続けながら、「我々」へと統合される。これに対して、個々人の個別性がそのなかで融解してしまうような感情の共同志向性を、シェーラーは「一体感(Einsfühlung)」と呼ぶ。この「共同志向性」としての「相互感情」を、クレスは現代の「愛の哲学」の文脈において高く評価する(Krebs: 2015)。クレスによれば、持続性を欠いた「性愛」や依存関係である「ケア」をモデルとした愛とは異なり、個人の個別性や自律を前提とする「相互感情」としての愛は、リベラリズムの原理と衝突しない。そのため、社会哲学において愛という現象を積極的に位置づけることが可能となる。

ところで、シェーラー自身も『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』(1913/16年)において、自らの社会哲学を展開している。彼は、行為と感情の両方を含めた「相互体験(Miteinandererleben)」の作用領域として、「群衆」、「生命共同体」、「社会」、「人格共同体」という四つの「社会的統一(soziale Einheit)」の形式を導入する。共同体と社会というテンニエスの図式を踏まえた上で、シェーラーは共同体が優先される「生命共同体」と個人が優先される「社会」とが総合された、より高次の共同

体として「人格共同体」を構想している。シェーラーによれば、この段階において、はじめて個人の個人として側面である「個人人格」と、共同体の成員としての側面である「総合人格(Gesamtperson)」が両立するという。こうしたシェーラーの社会哲学の構想をめぐっては、くだんの「相互感情」の作用領域が、この「人格共同体」に対応するするのか、それとも「生命共同体」に対応するののかということが問題となっている。どちらであるかをシェーラー自身は明示的に述べていないが、個々人の個別性が失われないという「相互感情」の特徴を考慮すれば、クレスの考えるように(Krebs: 2015)、この感情に対応するのは「人格共同体」であると考えるのが穏当だろう。しかし、シュロックスベルガーは「生命共同体」だという(Schlossberger: 2016)。さらに、問題なのは、シェーラー自身は「人格共同体」における「相互体験」の例として「愛」と「返愛」との関係のような共同志向性を挙げている点である。「AがBを愛し、同時にBがAを愛する」という対話的關係は、「AとBがCに対して同じ感情を共有する」という「相互感情」とは明らかに違う図式である。

本発表は、「相互感情」はやはり「人格共同体」に対応すると考えた上で、シェーラーにおいて、この「相互感情」と「相愛」という二つの共同志向性が、どのような関係にあるのかを明らかにすることを旨とする。第一に、本発表は個人の個別性が融解した共同志向性である「一体感(Einsfühlung)」との対比において、個別性が統合された共同志向性である「相互感情」を輪郭づける。そのために、リップスの感情移入(Einfühlung)論の批判として書かれた『共感の本質と諸形式』第一版(1913年)と、エディット・シュタインの感情移入論を受容した上で大幅に加筆された第二版(1923年)とを比較する。第二に、シュタイン同様、シェーラーも自らの「相互感情」の理論によって、第一次世界大戦とドイツ・ナショナリズムを熱狂的に支持したわけだが、この事実を示唆されるように、共同志向性には何らかの規範性が必要となる。本発表は、「相互感情」が価値評価や規範性を獲得するためには、「相愛」の対話的關係に媒介されなければならないことを示す。その際、シェーラーが「人格共同体」における「人格価値」と相互「責任」の概念とを「相愛」の対話的關係において結びつけていることが明らかになるだろう。最後に、「相互感情」は対話的關係に媒介されることによって、はじめて、シェーラーが言うところの社会的「連帯」として機能するような「拡がり」と「強さ」を獲得しうることを示す。

Gallagher, Shaun. 2008. Direct perception in the intersubjective context. *Consciousness and Cognition* 17: 535-543.

Goldie, Peter. 2000. *The Emotion*. Oxford: Clarendon.

Gilbert, Margaret. 1989. *On Social Facts*. Princeton: Princeton Uni Press.

Krebs, Angelika. 2015. *Zwischen Ich und Du*, Berlin.

Schmid, Hans Bernhard. 2000. *Subjekt, System. Diskurs*. London: Kluwer.

Schmid, Hans Bernhard. 2005. *Wir-Intentionalität*. Freiburg: Karl Alber.

Schmid, Hans Bernhard. 2009. *Plural Action*. Netherlands: Springer.

Schloßberger, Matthias. 2016. The Varieties of Togetherness. in: Alessandro Salice (ed.). *The Phenomenological Approach to Social Reality*. Switzerland: Springer. 173-195.

Searle, John. 1990. Collective Intentions and Actions, in: Philip R. Cohen (ed.). *Intentions in Communication*. Cambridge: Mit. 401-415.

Tuomela, Raimo&Miller, Kaarlo. 1988. We-Intentions. *Philosophical Studies*. 53(3). 367-389.